



Title	上博楚簡『曹沫之陳』の兵学思想
Author(s)	浅野, 裕一
Citation	中国研究集刊. 2005, 38, p. 160-195
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61257
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

上博楚簡『曹沫之陳』の兵学思想

浅野裕一

一 『曹沫之陳』の文献整理

『上海博物館藏戰國楚竹書(四)』(上海古籍出版社・二〇〇四年・十二月)には、『曹沫之陳』が収録されている。『曹沫之陳』はこれまで亡佚していた兵法書であり、そこには『孫子』を始めとする伝世の兵法書とは異なる兵学が説かれている。そこで小論では『曹沫之陳』に見える兵学思想の特色を探ることとしたい。

『曹沫之陳』は、完簡二十本、上半部と下半部を綴合した整簡二十五本、残簡二十本の合計六十五本から成る。ただし整簡の幾つかについては、綴合に疑問も残されている。簡長は約四七・五センチメートルで、編綫は三道、上下端は平斉である。第二簡の背に「曹沫之陳」と篇題が記される。

検討に先立ち、竹簡の整理と解説を担当した李零氏の

釈文と排列に、筆者の私見による修改を加えた形で、以下に全文を示す。段落ごとに附した番号は、竹簡の接続状況に応じて筆者が適宜附けたものである。また『曹沫之陳』には隸定や解釈の難しい箇所が多数存在するため、段落ごとにその主なものを選んで、筆者の考えを示して置く。

(1)

魯莊公將爲大鐘、型既成矣。曹沫入見曰、昔周室之邦魯、東西七百、南北五百、非(1)山非澤、亡有不民。今邦彌小而鐘愈大。君其圖之。昔堯之饗舜也、飯於土簋、歌於土鏞、(2)而撫有天下。此不貧於美而富於惠歟。昔周□……………(3)

魯の莊公は將に大鐘を為らんとして、型既に成る。

曹沫は入りて見えて曰く、昔え周室の魯に邦せしむるや、東西七百、南北五百にして、山に非ず沢に非ざれば、民ならざることを有ること亡し。今、邦は彌いよ小さくして鐘は愈いよ大なり。君其れ之を図れ。昔え堯の舜を饗するや、土簋に飯い、土鉶に獸むも、撫して天下を有てり。此れ美に貧しくして恵に富めるには不ざるか。昔え周□……………

魯の宮殿に入つた曹沫は、周王室から封建された当時の領土が縮小していく現状を省みず、音楽におぼれて大鐘を製作せんとする莊公の姿勢を批判する。そのため、堯が儉約に徹しながら天下を所有した例を引き、それを「美に貧しくして恵に富む」やり方だと賞賛して、莊公に節用を要請する。「昔周□……………」とあることから、おそらくこの後に、周の文王・武王も節用を実践し、奢侈に耽る殷の紂王を倒して天下を所有したとする例も引かれていたと思われる。

(2)

……………今天下之君子既可知已。孰能并兼人(4)哉。曹沫曰、君其母慎。臣聞之曰、鄰邦之君明、則不可以不修政而善於民。不然任亡焉。(5)鄰邦之君亡道、則

亦不可以不修政而善於民。不然亡以取之。莊公曰、昔池伯(施伯)語寡人曰、(6)君子得之失之、天命。今異於爾言。曹沫曰、【非】不同矣。臣是故不敢以古答。然而古亦(7)有大道焉。必恭儉以得之、而驕泰以失之。君言亡以異於臣之言。君弗盡。臣聞之曰、君(8)子以賢稱而失之、天命。以亡道稱而沒身就死、亦天命。不然、君子以賢稱、曷有弗(9)得。以亡道稱、曷有弗失。莊公曰、曼哉、吾聞此言。乃命毀鐘型而聽邦政。不晝(10)寢、不飲酒、不聽樂。居不設席、食不二味、(11)……………

……………今、天下の君子既に知るべきのみ。孰か能く人を并兼せんやと。曹沫曰く、君其れ慎うる母れ。臣之を聞きて曰く、鄰邦の君明なれば、則ち以て政を修めて民に善くせざるべからず。然らずんば亡ぶに任せん。鄰邦の君亡道なれば、則ち亦た以て政を修めて民に善くせざるべからず。然らずんば以て之を取ることを亡しと。莊公曰く、昔施伯は寡人に語りて曰く、君子の之を得ると之を失うとは、天命なりと。今、爾が言と異なれりと。曹沫曰く、同じからざるには【非ざる】なり。臣是の故に敢えて古えを以て答えざらんや。然り而うして古えにも亦た大道

有り。必ず恭儉にして以て之を得、驕泰にして以て之を失う。君が言は以て臣の言に異なること亡し。君は尽くさず。臣は之を聞きて曰く、君子賢を以て称えられて之を失うは、天命なり。亡道を以て称えられて身を没して死に就くも、亦た天命なり。然らずんば、君子賢を以て称えられて、曷ぞ得ざることに有らんや。亡道を以て称えられて、曷ぞ失わざること有らんやと。莊公曰く、曼なるかな、吾此の言を聞けりと。乃ち鐘型を毀つを命じて邦の政を聴く。昼に寝ねず、酒を飲まず、樂を聴かず。居るに席を設けず、食うに二味せず。……

第三簡と第四簡の間には、曹沫が莊公に対して、奪われた領土を回復するために、斉に戦いを挑むよう勧める内容を記す脱簡があったと思われる。これに対して莊公は、斉が大国で魯が小国なのは、天下の君子の周知するところであつて、努力の如何にかかわらず、失地を奪い返すことなど不可能だと応答したのであろう。第四簡の末尾は、对齐戦を洩る莊公の答えの一部だと考えられる。これに対して曹沫は、もし隣国の君主が聡明であれば、善政を布いて国内を結束させ、隣国に併合される事態を防がねばならず、逆に隣国の君主が暗愚であつても、や

はり善政を布いて国内を結束させるべきで、そうしないとせつかく隣国の君主が暗愚であつても、領土を奪えなくなる」と指摘する。つまり曹沫は、いずれにせよ君主の人為的努力は不可欠で、国内統治に意を用いさえすれば失地の回復は可能だと説得したのである。だが莊公は、君子が得るのも失うのも天命だとする謀臣・施伯の言を引き、自分が領土を失つたのも天命のせいだとして、依然として失地回復の勧めに否定的態度を示す。

すると曹沫は、次のような論理で反駁する。人間世界には、恭儉であれば得るし、驕慢で安泰を貪れば失うとの明確な因果律がある。この人間世界の因果律が当てはまらず、賢者だと称えられながら失つたり、無道だと非難されながら天寿を全うするというのであれば、人間世界だけで自己完結していない以上、天命が介入してきた結果だと考えざるを得ない。もしこうした天命が存在せず、前記の因果律が常に人間世界内部でのみ自己完結するのであれば、賢者は必ず得るし、無道は必ず失うのだが、実際にはそうでない場合がある。それではあなたは、努力し続けて賢者だと称えられながら、天命のせいであつた実例なのか。（あなたは努力して賢者だと称えられてはいないのだから、天命の事例に該当しないのではないか）。

ここで曹沫が語る論理のうち、努力は必ず報われると人間世界の因果律を説くところまでは、「昔は上世の暴王、其の耳目の淫、心塗の辟に忍ばず、其の親戚に順わず、遂に以て国家を亡失し、社稷を傾覆す。我れ罷不肖にして、政を為すこと善からざればなり」と言うを知らずして、必ず吾が命固より之を失えばなりと曰う」(『墨子』非命上篇)とする、墨家の非命説に極めてよく似た性格を示す(注1)。

だが曹沫の論理には、この因果律が常に貫徹するわけではなく、実際の世の中には、賢者が失敗したり、無道な者が失敗せずに済む実例が存在することを認め、それを天命が介入したせいだとして処理する論理も用意されている。この天命に関する論理は、「天有り人有り。天と人には分有り。天人の分に察らかなれば、而ち行うべきを知る。其の人あるも、其の世亡ければ、賢と雖も行われず。苟も其の世有らば、何の難きこと之れ有らんや」とか、「遇と不遇とは天なり」「窮達は時を以てす」といった、『窮達以時』に似た性格を示している。

ただし『窮達以時』の天は、時世・時勢の意味であつて、上天が直接命令を下したとの性格が前面に出てきてはいない(注2)。これに対して曹沫の論理は、(16)に「吾れの戦うは敵天命に順わざればなり」とあることを勘案すれば、上天が直接下した命令だとする意味合いが強い

と思われ、この点では『窮達以時』とは少しく異なっているとしなければならない。

それはともかく、曹沫の論理が、人為的努力は必ず好結果をもたらすとの人間世界内部の因果律の領域と、それが貫徹しない天命の領域を併存させる構造を備える点は、従来見られなかった特色で、古代思想史の上で注目すべき内容であろう。この曹沫の論理に接した莊公は、迂闊だったと反省し、昼寝・飲酒・音楽・奢侈を止め、国内統治に精励し始める。

なお「不同矣」の上の一字は、文意から「非」と推定して補つて置いた。

(3)

……兼愛萬民、而亡有私也。還年而問於曹(12)沫曰、吾欲與齊戰。問陳奚如、守邊城奚如。曹沫答曰、臣聞之、有固謀而亡固城(13)、有克政而亡克陳。三代之陳皆存、或以克、或以亡。且臣聞之、小邦處大邦之間、敵邦(14)

……萬民を兼愛して、私有ること亡きなり。還年にして曹沫に問いて曰く、吾は斉と戦わんと欲す。問う、陳するは奚如、辺城を守るは奚如と。曹沫答

えて曰く、臣之を聞く、固き謀有るも固き城亡く、克政有るも克陳亡しと。三代の陳は皆存するも、或いは以て克ち、或いは以て亡ぶ。且つ臣之を聞く、小邦の大邦の間に処るや、敵邦……

第十一簡と第十二簡の欠損部分には、国内統治に精励する莊公の姿が記されていたと思われる。第十二簡の「兼愛萬民、而亡有私也」はその部分の末尾であろう。

一度は斉に対する復讐戦に難色を示した莊公は、国内統治に精励した後、ついに斉と戦う決心をし、曹沫に陣法と守城法を質問する。これによつて、大鐘の製作をめぐる問答は、陣法に関する両者の問答を導くための伏線であつたことが判明する。また以下に述べられる陣法が、魯と斉の戦いを前提としたものであることも示されている。

莊公の質問に対し、曹沫は陣法や守城法よりも、まず国内の結束を固める施策の方が重要だと答える。なお「三代之陳皆存」との発言は、夏・殷・周三代の陣法と称する兵法書が流伝していた可能性を示唆していて興味深い。

(4)

……其食足以食之、其兵足以利之、其城固(15)足以

捍之。上下和且輯、繆紀於大國、大國親之、天下……
(16)

……其の食足らば以て之を食し、其の兵足らば以て之を利くし、其の城の固きこと足らば以て之に捍ぐ。上下和して且つ輯わば、大國に繆紀して、大國之に親み、天下……

ここには国内の結束を固めて大國と友好的な關係を築くための具体的方策が述べられるが、前後が残欠してゐて本来の位置が不明であるため、全体の文意も明確ではない。

(5)

交地不可以先作怨。疆地毋先必取口焉。所以距邊。毋愛貨資子女、以事其(17)便嬖。所以距内。城郭必修、繕甲利兵、必有戰心以守。所以爲長也。且臣之聞之、不和(18)於邦、不可以出豫。不和於豫、不可以出陳。不和於陳、不可以戰。是故夫陳者、三教之(19)末。君必不已、則由其本乎。莊公曰、爲和於邦如之何。曹沫答曰、毋獲民時、毋奪民利(20)。申功而食、刑罰有辜、而賞爵有惠。凡畜羣臣、貴賤同待、祿母負。詩

於有之曰、豈⁽²¹⁾弟君子、民之父母。此所以爲和於邦。莊公曰、爲和於豫如何。曹沫曰、三軍出、君自率⁽²²⁾、必聚羣有司而告之。二三子勉之、過不在子在【君】。期會之不難、所以爲和於豫。莊公又問⁽²³⁾。爲和於陳如何。答曰、車間容伍、伍間容兵、貴有常。凡貴人思處前位一行。後則見亡。進⁽²⁴⁾必有二將軍。無將軍必有數獄大夫、無裨大夫必有數大官之師、公孫公子。凡有司率長⁽²⁵⁾、伍之間必有公孫公子。是謂軍紀。五人以伍、萬人⁽²⁶⁾【以軍】……………

交地には以て先に怨を作すべからず。疆地には先んずること母くして必ず口を取れ。辺を距つる所以なり。貨資子女を愛むこと母く、以て其の便嬖に事う。内を距つる所以なり。城郭必ず修まり、甲を繕い兵を利くして、必ず戦心有りて以て守る。長を爲す所以なり。且つ臣之を聞けり。邦に和せざれば、以て豫を出だすべからず。豫に和せざれば、以て陳を出だすべからず。陳に和せざれば、以て戦うべからずと。是の故に夫の陳なる者は、三教の末なり。君必ず已まざれば、則ち其の本に由らんかと。莊公曰く、和を邦に爲すは之れ如何と。曹沫答えて曰く、民の時を獲^{とら}つこと母かれ、民の利を奪うこと母かれ。功

を申べて食わせ、刑するには暴有るを罰し、賞するには惠有るに爵す。凡そ羣臣を畜うは、貴賤も待を同じくして、禄するに負うこと母かれ。詩に之有りて曰く、豈弟の君子は、民の父母と。此れ和を邦に爲す所以なりと。莊公曰く、和を豫に爲すは如何と。曹沫曰く、三軍出づるときは、君自ら率い、必ず羣有司を聚めて之に告ぐ。二三子之に勉めよ、過ちの子に在らずして【君に】在りと。会せんことを期するの難からざるは、和を豫に爲す所以なりと。莊公又た問う。和を陳に爲すは如何と。答えて曰く、車間に伍を容れ、伍間に兵を容れ、常有るを貴ぶ。凡そ貴人は前位の一行に処らんことを思う。後るれば則ち亡ぶを見ん。進むには必ず二將軍有り。將軍無ければ必ず數獄大夫有り、裨大夫無ければ必ず數大官の師・公孫公子有り。凡そ有司・率長は、伍の間に必ず公孫公子有り。是を軍紀と謂う。五人は伍を以てし、万人は【軍を以てす】……………

「交地」は、帰属する国家が度々変わり、両国の勢力が交叉する土地を指すのであろう。向背が一定しないので、相手の怨みを買うような先制攻撃をかけてはならないとされる。『孫子』九地篇にも「交地」が登場し、そこでは

「我も以て往くべく、彼も以て来たるべき者は、交と為す」「交地には則ち絶つこと無し」と述べられる。

だが『孫子』の場合は、第三国の領内をいくつも通過するような長距離進撃が前提とされており、『曹沫之陳』の「交地」とは意味が違ふと思われる。「疆地」は隣国が支配する境界の土地で、やはり先制攻撃をかけてはならず、住民の人心を収攬するのが先決だとされる^(注3)。

この二つは「辺を距つる所以」だと述べられるが、「辺」は魯に隣接する斉の辺境地域で、かつては魯の領土だった土地を指すのであろう。「距」は隔離・分断の意味で、「辺を距つる所以」とは、かつては魯の領土で、その後斉に奪われた斉の辺境地域を、斉の支配から隔離・分断する方策を指すと思われる。

「内を距つる所以」とは、斉の朝廷内に対する分断工作で、斉の寵臣に賄賂を贈って買収し、自国に有利な言動を取らせる方策を指す。したがって「辺」も「内」も、起点は斉にある。

「長を為す所以」とは、斉の侵攻が予想される国境地域を守備する方策を指す。「長」は(13)に「母長於父兄」とあるのと同じ用法で、凌駕する意味であらう。城郭・装甲・兵器などを整備して、旺盛な戦闘意欲を維持して守備するのが、敵の攻撃を凌駕する方策だといふのであ

る。

続いて(5)は、邦↓豫↓陳↓戦との四段階を示す。

「豫」は国内各地から招集・動員されて集結し、戦場を目指して行軍隊形を取る軍隊を指す。会戦に至る予備段階の状態で、いまだ戦闘隊形に部署割りされていない。

「陳」は会戦に臨んで編制される戦闘隊形で、縦隊だった行軍隊形を左右に展開させ、戦闘序列に従って前・中・後の三列に編制し直した布陣を指す。

これを承けて莊公は、「和を邦に為す」方策を訊ねる。

これに曹沫が示した方策は、農繁期を避けて、民を動員する時期の判断を誤らないこと、民が生業で生み出す利益を収奪しないこと、功績を精査して饗応し、賞罰を適切・公平に与え、爵や禄を惜しまずに与え、身分差を超えて同一の基準を適用して待遇し、功績が大きいにもかかわらず支給される禄が薄く、君主が臣下に負債を負う状態を避けることなどである。

続いて莊公は、「和を豫に為す」手段を質問する。これに対して曹沫が示した手段は、君主自らが陣頭指揮を執り、都城に終結した軍隊に自ら号令し、君主が全責任を負い、決して諸君に責任を転嫁したりしないと言言して、士気を鼓舞するといふものである。君主が信頼されていて、国内各地から招集した部隊を、期日通りに都城に終

結させられるのであれば、それこそが「和を豫に為す」手段だとされる。こうした主張は、民を大量に動員するため、戦意高揚が重要な課題であった状況を反映している。両軍対峙後の正攻法による会戦であるため、『孫子』とは異なり、勢や詭計に頼って戦意を高揚させることはできない。そこで君主親征が極めて有効な手段として強調されるのである。

続いて莊公は、「和を陳に為す」手段を質問する。これに対して曹沫は、数輛の戦車で車列を組ませ、車列と車列の間に随伴歩兵を配置し、歩兵部隊ごとに弓弩・戈戟などの兵器を配備するとの陣形を、常を守るべき陣形として示す。戦車と歩兵を交互に配置しながら横に展開する戦闘隊形(行)は、前・中・後の三行が作られるが、貴族は最前列の車列に乗り込んで先陣を切ることが要請される。民の士気を高めるためである。

突撃は卿の身分にある左右二将軍が陣頭指揮を執るのが望ましいとされる(注4)。老齢や病氣などで将軍が指揮を執れない場合は数人の獄大夫が、獄大夫が指揮できない場合は裨大夫が、裨大夫も指揮できない場合は数名の大官の師(役所の長官)や公孫・公子が指揮を執るのが望ましいとされる(注5)。このように貴人が率先して陣頭指揮すべきことを力説する点に『曹沫之陳』の特色が存

在し、随伴の歩兵部隊にも、必ず公孫・公子を有司・率長として配置すべきことが説かれる。曹沫はこれを軍紀(軍の筋目)と称し、統治者層が率先して指揮官を務めることにより、民の士気を高めて結束させるのが、「和を陳に為す」手段だという。

また第二十六簡では、五人↓伍、万人↓軍との編制単位が示される。これによって、魯では伍を基本単位として軍を編制した様子が窺えるが、伍↓卒↓旅↓軍との編制単位を示す『孫子』謀攻篇と比較すると、中間の単位に言及されず、最小単位の伍から一足飛びに最大単位の軍に及ぶのは、不可解でもある。

(6)

……母誅而賞、母擧百姓、而改其將。君如親率(27)、

……

……誅して賞すること母く、百姓を擧すること母く、其の將を改む。君如し親ら率いば……

ここには敗戦の責任を民に転嫁したりせず、指揮官の責任を追及すべきことが説かれ、また君主親征にも言及されるが、前後が残欠していて本来の位置が不明である

ため、全体の文意も明確ではない。

(7)

又知舍有能、則民宜之。且臣之聞之、卒有長、三軍有帥、邦有君。此三者所以戰。是故長(28)必約邦之貴人及邦之奇士、御卒使兵、母復失(29)……………

又た有能を^と含むるを知らば、則ち民は之を宜しとす。且つ臣之を聞く。卒に長有り、三軍に帥有り、邦に君あり。此の三者は戦う所以なりと。是の故に長は必ず邦の貴人及び邦の奇士と約し、卒を御し兵を使いて、復た失うこと母く……………

ここの「卒」は部隊の意味であろう。ここでもやはり貴族や技量の高い戦士を部隊長に任命すべきことが強調される。兵士の大半は一般の民であるため戦意に乏しく、伝統的權威や特殊能力を備えた人物を指揮官に据える手段により、士気を高揚させようとするのであろう。ただし第二十八簡と第二十九簡を接続することには、疑念も残る。第二十九簡は、平時から部隊長となる将校を選任して置く処置を述べる、別文の可能性が高い。

(8)

……………
【立】厚食、思爲前行。三行之後、苟見短兵、
枚(30)

……………厚食を「立つるは」、前行を為さしめんと思えばなり。三行の後に、苟も短兵を見れば、枚

兵卒を厚食でもてなすのは、三行の中の前行に志願させるためだと説明される(注6)。これによって、左右兩翼に開いた戦列は、前・中・後の三列で構成されていたことがわかる。古くは独立の歩兵部隊を行と呼んだが、『曹沫之陳』では戦車と歩兵を交互に配置しながら横に展開する戦闘隊形を行と呼んでいる。

(9)

……………失車甲、命之母行。(明日)將戰、思爲前行。
諜人(31)來告曰、其將帥盡傷、車連皆裁。曰、將(担)行。乃……………

……………車甲を失わば、之に命じて行かしむること母かれ。(明日)將に戦わんとすれば、前行為らんことを思わしむ。諜人來りて告げて曰く、其の將帥は尽

く傷つき、車連も皆裁つと。曰く、将に（担）行せんとすと。乃ち……

ここには会戦に敗れた後の処置が述べられる。会戦に敗れ装甲と戦車を失った部隊に対しては、その場からの退却を禁じ、翌日再び戦うときには、最前列の行に志願させる。

「戦連皆裁」の「戦」は、「駢」が車の簡文であることから車の意味で、ここでは戈で武装した兵員が乗り込んだ戦車を指す。「車連」は馬と車を繋ぐ綱を指す。「皆裁」は戦車が破損したり、転覆したりして綱が切れ、馬と車がバラバラになった状態を指す。

会戦に敗北し、指揮官は全員負傷し、車と馬も分断されてしまったので、装備をかついで退却したいと伝令が連絡してきた状況が語られるが、それに対する処置は竹簡が欠損しているため不明である。ただし第三十一簡と第三十二簡は意味の繋がりが悪く、両者を接続することには疑念が残る。

(10)

【出】白徒、（担）（注）食華兵、各載爾藏、既戰將量、爲之（32）

白徒を【出だし】、食を（担いて）兵を輩せ、各おの爾の藏を載せ、既に戦いて将に量らんとすれば、之が為に……

李零氏は（9）と（10）を綴合して整簡とするが、上述のように文意が必ずしも明快に接続しないので、私見により分離して置く。白徒に担がせて前線に物資を補給することが述べられるが、前後が残欠していて本来の位置が不明であるため、全体の文意も明確ではない。なお白徒の上の一字は、文意から「出」と推定して補って置いたが、「命」の可能性もあるであろう。

(11)

治。果勝矣。親率勝。使人不親則不敦、不和則不輯、不義則不服。莊公曰、爲親如（33）何。答曰、君母憚自勞、以觀上下之情僞。匹夫寡婦之獄訟、君必身聽之。有知不足、亡所（34）不中、則民親之。莊公又問。爲和如何。答曰、母嬖於便嬖、母長於父兄、賞均聽中、則民（35）和之。莊公又問。爲【義】如何。答曰、申功上賢、能治百人、使長百人、能治三軍、思帥授（36）【之】

治。果なれば勝つ。親ら率いければ勝つ。人をして親まざら使めば則ち敦からず、和せざれば則ち輯わす、義ならざれば則ち服さず。莊公曰く、親しむを為すは如何と。答えて曰く、君自ら勞するに憚かること母く、以て上下の情偽を觀よ。匹夫・寡婦の獄訟は、君必ず身ら之を聴け。足らざるを知ること有りて、中らざる所亡ければ、則ち民は之に親しまん。莊公又た問う。和を為すは如何と。答えて曰く、便嬖に嬖すること母く、父兄を長くこと母く、賞均しくして聴くこと中らば、則ち民は之に和せん。莊公又た問う。【義】を為すは如何と。答えて曰く、功を申べて賢を上げ、能く百人を治むるものは、百人に長たら使め、能く三軍を治むるものは、帥いせんことを思ひて【之】に授く。

ここで曹沫は親・和・義の重要性を説く。最初の「爲親」の方策は、君主自ら獄訟を裁き、下民の實情に精通して、民衆を親附させることだと説明される。次の「爲和」の方策は、公族・寵臣を身びいきせず、共同体の序列を尊重しながら、国内を公平に統治することだと説明される。最後の「爲義」の方策は、能力主義・尚賢主義に基づき、実績に照らして指揮官を選任する事だと説明

される。

「爲【義】如何」の二番目の文字を李零氏は隸定してないが、前後の文脈から「義」と判断して補つて置いた。また最後の「之」字は、次簡の冒頭にあつたと推定して補つて置いた。

(12)

……民者。毋攝爵、毋御軍、毋避皐。用都教於邦。【古】有戒言曰、奔爾征褫、不奔爾或興或康以(37)會。故帥不可思奔、奔則不行。戰有顯道、勿兵以克。莊公曰、勿兵以克奚如。答曰、人之兵(38)不砥礪、我兵必砥礪。人之甲不堅、我甲必堅。人使士、我使大夫。人使大夫、我使將軍。人(39)使將軍、我君身進。此戰之顯道。莊公曰、既成教矣。出師有忌乎。答曰、有。臣聞之。三軍出(40)【乎】境必勝、可以有治邦。周志是存。莊公曰、(41)……

……民者。爵を摂むこと母かれ、軍を御すること母かれ、皐を避くること母かれ。都教を邦に用う。【古えに】戒言有りて曰く、奔らば爾の征は掩れ、奔らざれば爾れ或に興に或に康くして以て会すと。故に帥いるに奔るを思ふべからず、奔らば則ち行かず。

戦いに頭道有りて、兵は以て克つこと勿しと。莊公曰く、兵は以て克つこと勿しとは奚如と。答えて曰く、人の兵砥礪ならざれば、我が兵は必ず砥礪にす。人の甲堅からざれば、我が甲は必ず堅にす。人、士を使わば、我は大夫を使う。人、大夫を使わば、我は將軍を使う。人、將軍を使わば、我は君身ら進む。此れ戦いの頭道なりと。莊公曰く、既に教えを成せり。師を出だすに忌むこと有るか。と。答えて曰く、有り。臣之を聞く。三軍境に出でて必ず勝つは、以て邦を治むること有るべしと。周志に是れ存すと。莊公曰く、……

先頭の第三十七簡には、爵を惜しむな、軍を後方から制御するな、責任を問われて有罪とされる事態を回避するな、国都で定めた教令を全国的に施行せよ、といった主張が列記されるが、これ以前の竹簡が欠損しているため、前とのつながりは不明である。

李零氏は上半部と下半部を綴合して第三十七簡を整簡とするが、軍を奔走させるなどとする後文とは文意が必ずしも明快に接続しないから、この綴合には問題が残されているであろう。

続いて曹沫は、戦場に向かって軍を奔走させてはなら

ないと説く。これは、「軍争は利為り、軍争は危為り」とする『孫子』軍争篇と似た発想と言える。なお文意から「奔爾正衽」の「正」は「征」に、「衽」は「褌」に文字を改めた。

次に曹沫は、「勿兵以克」との考えを示す。その真意は、戦いは兵器で勝つのではなく(注8)、人で勝つのであり、敵軍の指揮官よりも地位の高い人物を指揮官に任命すれば、戦意が高揚して勝利できるところにある。これを曹沫は「戦の頭道」と称している。

続いて話題は「出師の忌」、すなわち軍の出征に関する禁忌に移る。国境付近に出征して勝利するためには、国内統治の成功が不可欠であることが力説される。なお曹沫が『周志』の存在を指摘している点は興味深い。

(13)

其將卑、父兄不薦、由邦御之。此出師之忌。莊公又問曰、三軍散裹有忌乎。答曰、有。臣聞(42)之。三軍未成、陳未豫、行阪濟障、此散裹之忌。莊公又問曰、戰有忌乎。答曰、有。其去之(43)不速、其就之不附、其啓節不疾、此戰之忌。是故疑陳敗、疑戰死。莊公又問曰、既戰有忌乎。(44)答曰、有。其賞淺且不中、其誅厚且不察、死者弗收、傷者弗問、既戰而有殆心、

此既戰之忌。

其の将卑にして、父兄は薦めず、邦由り之を御す。此れ師を出だすの忌なり。莊公又た問いて曰く、三軍の散裏に忌むこと有るか。答えて曰く、有り。臣之を聞く。三軍未だ成らず、陳未だ豫ならざるに、阪を行き障を濟るは、此れ散裏の忌なり。莊公又た問いて曰く、戦いに忌むこと有るか。答えて曰く、有り。其の之を去ること速からず、其の之に就くと附ちかからず、其の節を啓くこと疾からざるは、此れ戦の忌なり。是の故に疑陳は敗れ、疑戦は死す。莊公又た問いて曰く、既に戦うに忌むこと有るか。答えて曰く、有り。其の賞は浅くして且つ中らず、其の誅は厚くして且つ察せず、死者は収められず、傷者は問われず、既に戦いて殆ぶむ心有るは、此れ既に戦うの忌なり。

第四十二簡は「出師の忌」の続きであるが、第四十一簡の下半部が残欠しているため、途中に若干の欠落が存在する。

「出師の忌」の続きとして、指揮官の地位が低く、父兄の支持もないため、君主が後方から前線の軍を制御す

ることが、軍の出征に関する禁忌とされる。

次に莊公は、「散裏の忌」、すなわち軍の集散に関する禁忌について訊ねる。これに対する曹沫の答えは、行軍隊形が整わぬうちに險阻な地形を乗り越えようとすると、軍が分離してしまう危険があり、これが軍の集散に関する禁忌だというものである。

次に莊公は「戦の忌」、すなわち戦闘に関する禁忌について訊ねる。曹沫の答えは、戦場に向けての軍の移動が迅速でなく、戦場への集結が緊密でなく、戦闘隊形を組むことが迅速でないのが戦闘に関する禁忌だというものである。これは縦隊で行軍して戦場に到着した後、左右両翼に展開して戦闘隊形の車列に変換する作戦行動を前提としたものである。また戦闘に臨む方針が確定せず、不徹底な布陣をしたり、躊躇しながら戦う疑陳・疑戦も、戦闘に関する禁忌とされる^(注9)。

次に莊公は「既戦の忌」、すなわち戦後の処置に関する禁忌について訊ねる。これに対して曹沫は、軍功を上げた者への恩賞は薄く、過失のあった者への刑罰は重く、しかも適切ではなく、戦死者の死体は収容されず、負傷者は慰問されず、国内に危ぶむ心を生ずることなどが、戦後の処置に関する禁忌だと答える。

(14)

莊(45)公又問曰、復敗戰有道乎。答曰、有。三軍大敗不勝、卒欲少以多。少則易較、圻成則易(46)

莊公又た問いて曰く、敗戦を復するに道有るか。と。答えて曰く、有り。三軍大敗して勝たず、卒は少きも以て多きを欲す。少ければ則ち較(あき)らかにし易く、圻成れば則ち……し易く

莊公は「敗戦を復する」道、すなわち三軍が大敗した後に態勢を立て直す方策を訊ねる。敗残兵を再編して密集隊形を組ませることを説いているようであるが(注10)、未釈字や欠損部分が多く、全体の文意は不明である。なお「少則易較」の「較」は、「較」と隸定して明白の意に解した

(15)

……【死】者収之、傷者問之。善於死者爲生者。君(47)不可不慎。不依則不恒、不和則不輯、不兼畏……(48)

……【死】者は之を収め、傷者は之を問う。死者に

善くするは生くる者の為なり。君は慎まざるべからず。依らざれば則ち恒ならず、和せざれば則ち輯わず、兼ねて……を畏れざれば

「敗戦を復する」道の続きである。戦死者の死体を収容し、負傷者を慰問するのは、志願者の意欲を殺いで、損耗した兵員の補充を困難にしない配慮だと説明される。また依・和・兼畏の重要性が指摘される。全体の内容から判断して、この場合の作戦再興の策源地は国都であると考えられる。なお冒頭の「者」の上に「死」字があったと推測され、補って置いた。

(16)

……於民。莊公曰、此三者足以戰乎。答曰、戒。勝(49)則祿爵有常、忌莫之當。莊公又問曰、復槃戰有道乎。答曰、有。既戰復豫、號令於軍中(50)曰、繕甲利兵。明日將戰。則旗旄傷亡、槃就行……□人。吾戰敵不順於天命、返師將復。戰(51)毋殆、毋思民疑。及爾龜策、皆曰勝之。改祓爾鼓、乃失其服。明日復陳、必過其所。此復(52)槃戰之道。莊公又問曰、復鉗戰有道乎。答曰、有。必賞首皆欲或之。此復鉗戰之道。莊公又問(53)曰、復缺戰有道乎。答曰、有。収而

聚之、束而厚之、重賞薄刑、思忘其死而見其生、思良⁽⁵⁴⁾車良士往取之耳。思其志起、勇者思喜、憚者思悔、然後改始。此復缺戰之道。莊公又問曰⁽⁵⁵⁾、善攻者奚如。答曰、民有保。曰城、曰固、曰阻。三善盡用不棄、邦家以宏。善攻者必以其⁽⁵⁶⁾所有、以攻人之所亡有。莊公曰、善守者奚如。答曰、……⁽⁵⁷⁾

……於民。莊公曰く、此の三者は以て戦うに足るかと。答えて曰く、戒しめよ。勝つは則ち祿爵に常有りて、忌に之れが当たること莫ければなりと。莊公又た問いて曰く、槃戦を復するに道有るかと。答えて曰く、有り。既に戦いて豫に復するに、軍中に号令して曰く、甲を繕い兵を利くせよ。明日將に戦わんとすれば、則ち旗旌^{（きし）}は傷亡するも、槃は行に就け……□人、吾れの戦うは敵天命に順わざればなり。師を返して將に復せんとすと。戦うに殆ぶむこと母かれ。民をして疑いを思わしむること母かれ。爾の龜策に及ぶや、皆曰く、之に勝つと。爾の鼓を改祓すれば、乃ち其の服を失わん。明日陳に復するは、必ず其の所を過ぐ。此れ槃戦を復するの道なりと。莊公又た問いて曰く、鉗戦を復するに道有るか。答えて曰く、有り。必ず首を賞して皆之或

らんと欲す。此れ鉗戦を復するの道なりと。莊公又た問いて曰く、缺戦を復するに道有るかと。答えて曰く、有り。収めて之を聚め、束ねて之を厚くす。賞を重くし刑を薄くして、其の死を忘れて其の生くるを見んことを思い、良車・良士は往きて之を取らんことを思うのみ。其の志の起たんことを思わば、勇者は喜ばんことを思い、憚る者は悔やまんことを思う。然る後に改めて始む。此れ缺戦を復するの道なりと。莊公又た問いて曰く、善く攻むる者は奚如と。答えて曰く、民に保有り。曰く城、曰く固、曰く阻。三善尽く用いられて棄てざれば、邦家は以て宏し。善く攻むる者は必ず其の有つ所を以て、以て人の有つこと亡き所を攻むと。莊公曰く、善く守る者は奚如と。答えて曰く、……

莊公は「此三者足以戦乎」と訊ねているが、「三者」は第四十八簡に出ている依・和・兼畏を指すと思われる。次に莊公は「復盤戦」の方策を質問する。ただし「盤戦」では文義が通じない。「盤」は「槃」の籀文で、「槃」は「癰」に通じて創傷の意を表す。そこで「復槃戦」は、会戦に敗北して損傷を受けた軍を立て直す方策の意味と解

釈した。「既戦」は軍が既に一度戦ったことを示す。「復豫」は軍が敗北して戦場から退却し、行軍隊形に戻ったことを示す。「甲繕利兵」は兵装や兵器が損傷した状況を示す。「明日將戰」は軍を立て直して明日再び戦おうとする意志を示す。「旌旄傷亡」は軍旗も破損した状況を示す。「槃就行」は槃が退却した軍の中に存在することを示す。損傷した部隊（槃）を行に補充して戦力を回復させる意味である。ただし李零氏は上半部と下半部を綴合して第五十一簡を整簡とするが、前後の文意が明瞭に接続しているとは言い難く、この綴合には疑問が残される。この間に竹簡一本程度の脱落があると見た方がよいであろう。

「吾戰敵不順於天命」は戦争目的の正当性を再確認する行為を指す。「返師將復」は戦場に戻って再度戦う意志を示す。作戰再興の策源地は、退却して再集結した地点である。

「戦母殆、母思民疑」は兵士の大半が民である状況を示す。一度敗北しているので、疑念を払拭して、勝利を確信させる。「及爾龜策、皆曰勝」は天佑神助を信じさせる宣伝工作を指す。「改祕爾鼓、乃失其服」は、敗北したからと言って突撃の合図に用いる鼓を隠したりすると、兵士は服従しなくなるとの意味であろう（注¹²）。「𦏧𦏧」は隸

定されていないが、「祕」と隸定して閉・闕の意味に解した。「明日復陳、必過其所」は、明日「豫」から再び戦闘隊形に戻すときは、一度敗北した地点を行き過ぎてからにし、敗北した地点よりも前進して士気を高める意味であろう。

続いて莊公は「復甘戰」の方策を質問する。だが「甘戰」のままで、文義が通じない。

「甘」を「鉗」の字に改め、箝・緘と同じく閉の意に解した。「鉗戰」とは、怯えた兵士が進軍を渋り、金縛りになった状態を指す。したがって「鉗戰を復するの道」は、恐怖心から拘束状態に陥った軍を立て直す方策である。

「必贊首皆欲或之」の二番目の文字は、通常「貢」字に隸定される文字であるが、ここでは「賞」に隸定し、この句全体を、先頭を進む者には重賞を与え、競って前進させる意味に解釈した。

次に莊公は「復故戰」の方策を質問する。二番目の文字は私見により「缺」字に隸定し、「缺戰」を兵士が戦意を欠き、布陣したまま突撃しない状態と解釈した。

「収而聚之、束而厚之」は、部隊を集結させて密集隊形を組み、恐怖心を取り除くこと。「重賞薄刑、思忘其死而見其生」は、重賞薄刑で士気を鼓舞し、死の恐怖を忘れ、生き残って重賞を獲得せんことのみを思わせること。

「思良車良士往取之耳」は、優秀な戦車と歩兵が、突撃して賞を得る結果だけを思うこと。「思其志起、勇者思喜、思者思悔」は、戦意を高揚させれば、勇者は賞を得て喜ぶ結果になるだろうと考え、怯者は勇戦しなければ賞をもらい損ねて後悔するだろうと考えること。「然後改始」は、態勢を立て直した後に再度戦闘命令を出すこと。

次に莊公は「善攻」と「善守」について質問する。「善攻」の内容は城・固・阻の薄弱な地点を攻撃することだと説明されるが、「善守」の側の内容は竹簡が欠損しているため不明である。

(17)

所以爲毋退。率車以車、率徒以徒、所以同死【生】
……………(58)

退くこと母きを為す所以なり。車を率いるには車を以てし、徒を率いるには徒を以てするは、死【生】を同じくする所以なり。……………

「率車以車、率徒以徒」との内容から、軍が戦車と歩兵の混成軍であった状態が確認できる。騎兵に全く言及されない点に留意すべきである。

(18)

……………其志者寡矣。莊公又問曰、吾有所聞之。一出言三軍皆懼、一出言三軍皆往、有之乎。答曰、有。明慎、以戒弗將弗克。母冒以陷、必過前攻(60)、賞獲詔、以勸其志。勇者喜之、懼者悔之。萬民(61)……………

……………其の志す者は寡し。莊公又た問いて曰く、吾れ之を聞く所有り。一たび言を出だせば三軍皆懼び、一たび言を出だせば三軍皆往くと。之有りやと。答えて曰く、有り。慎むを明らかにして、以て將いざれば克たざるを戒む。冒は以て陷ること母く、必ず前攻を過ぎて、獲たるを賞して惹るるを詔し、以て其の志を勸む。勇者は之を喜び、懼るる者は之を悔む。萬民……………

莊公は、將帥がひとたび発すれば、全軍が歓喜して前進するような弁舌はあるかと質問する。これに対して曹沫は、將帥の統率に従わなければ勝てないことを戒め合、先頭部隊が進軍を渋ってはならず、必ず前回の進出地点を超えて前進せよと命じ、軍功を上げた者を賞し怯

える者を叱咤して士気を鼓舞するのが、その弁論だと答える〔注13〕。

(19)

……□多。四人皆賞、所以爲斷。如上獲而上聞、命……(62)

……□多。四人皆賞せらるるは、断を為す所以なり。如し上獲て上聞かば、命……

この第六十二簡は断簡であり、前後の接続が不明なため、文意も明確ではない。

(20)

……乃自過以悦於萬民、弗臻危地、母亦食……(63)

……乃ち自ら過ちて以て万民を悦ばすは、危地に臻らざるも、母亦食……

李零氏は上半部と下半部を綴合して第六十三簡を整簡とするが、上下の意味の接続が明快ではないので、ここでは切り離して置く。また「臻」字は私見により「臻」

字に隸定した。

(21)

……飴鬼神物武、非所以教民。唯君其知之。此(63)先王之至道。莊公曰、沫、吾言是否、而毋惑諸小道歟。吾一

……鬼神・物武に飴るは、民を教うる所以には非ざるなり。唯だ君其れ之を知れ。此れ先王の至道なりと。莊公曰く、沫よ、吾れ是否を言うも、諸を小道に惑うこと母からんか。吾れ一たび……

李零氏は上半部と下半部を綴合して第六十四簡を整簡とするが、それでは右契口と左契口が一枚の竹簡上に混在することになるし、文意の接続も明快ではないので、切り離して置く〔注14〕。「物武」は文義不詳であるが、鬼神と併称されていることから推測するに、軍神の類であろう。鬼神・軍神に供物を捧げて加護を祈るといった神頼みは、民を教化する手段にはならないとの主張で、曹沫はこれを「先王之至道」と称する。

なお「飴」は「餌」に隸定し、さらに「飴」字に改めた。

(22)

……欲聞三代之所。曹沫答曰、臣聞之。昔之明王之起⁽⁶⁴⁾於天下者、各以其世、以及其身。今與古亦然。亦唯聞夫禹湯桀受矣⁽⁶⁵⁾。

……三代の所を聞かんと欲すと。曹沫答えて曰く、臣之を聞く。昔の明王の天下に起こる者は、各おの其の世を以てして、以て其の身に及ぶと。今と古えも亦た然り。亦た唯だ夫の禹・湯・桀・受に聞けと。

莊公は夏・殷・周三代の興亡について質問する。これに対して曹沫は、古代の明王が興起して新王朝を開いたについては、先祖代々の累積が当身に顕現するのであって、禹・湯が成功したのも、桀・受(紂)が失敗したのも、そこに至る蓄積があつての結果であり、一代のみの功績や責任ではないと述べる。曹沫の真意は、過去の三代の教訓から莊公も学ぶべきであり、今、莊公が斉に奪われた失地を回復して中興の実を挙げなければ、後世の魯君は国家を失うことになるとして、莊公に断固として失地回復の戦いを起こすよう促す点にある。

第六十五簡は、「亦唯聞夫禹湯桀受矣」の後に墨鉤があり、それ以下が留白になっていることから、ここが篇末

だと考えられる。

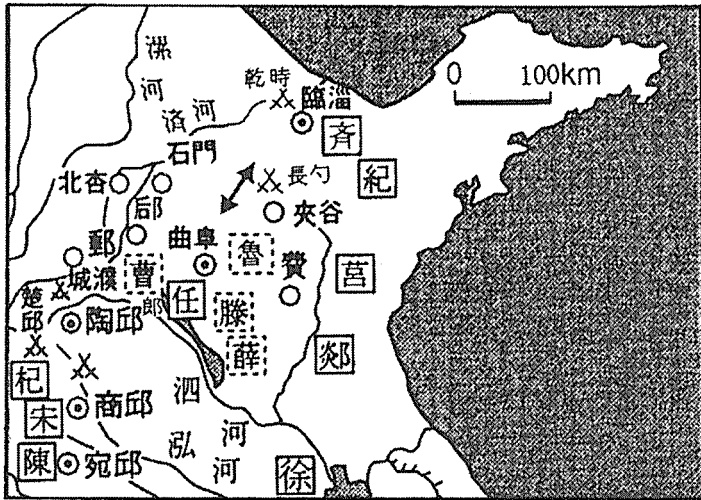
二 『曹沫之陳』の兵学的特色

(1) 戦争目的と戦争の性格

『曹沫之陳』は、曹沫が魯の莊公(在位…前六九三〜前六六二年)に対し、斉に奪われた領土を奪回すべく、失地回復の戦いを勧める状況を設定する。「還年にして曹沫に問いて曰く、吾は斉と戦わんと欲す」(3)と、ついに斉との戦いを決意した莊公は、「問う、陳するは奚如、辺城を守るは奚如」(3)と、曹沫に兵法を質問し始め、『曹沫之陳』は両者の問答で全体が構成されている。

したがって戦争目的は、国境付近の城邑を防衛しつつ、斉との会戦に勝利して有利な立場で講和し、斉が奪った土地を魯に返還させるといった、国境沿いの城邑の奪回にある。したがって、数日といった短期間の会戦がそのまま戦争全体である形態を取る。そのため、数年にわたる長期戦は想定されず、進撃距離も魯の国都・曲阜から斉との国境付近までと、一〇〇キロメートル内外の短い

距離が想定されている。(図 I 参照)



(図 I)

『孫子』は、六十二年にわたる呉越抗争を状況として設定するが、呉越抗争は国境沿いの土地の争奪が戦目

的ではなく、敵国の完全制圧を目的とし、前四七二年の呉の滅亡で終結している。また『孫子』の作者とされる孫武が立案した呉の対楚戦役も、敵国の覆滅を目指した長期戦で、前五一年から前五〇六年の楚都・郢の占領まで六年間継続している。

したがって『孫子』の場合は、一度の会戦がそのまま戦争全体となる単純な形を取らず、国境を突破した遠征軍が、機動戦をくり返して進路や目的地を秘匿しながら敵国奥深く進入し、国都攻略の擬態を演出する一方、自軍が脱出不可能な重包囲に陥ったかの状況を自ら作り出して、敵の主力軍を誘い出し、決戦に勝利して敵国の意図を挫いた後に帰還するとの複雑な構造を持つ。

これに比べると『曹沫之陳』が想定する戦争は、期間も進撃距離も極めて短く、戦場も国境近辺の一点に想定されるために、『孫子』のように補給の困難さが強調されることはなく、前線への軍需物資の輸送が国家経済を疲弊させるとの警告も説かれない。

「三軍境に出でて必ず勝つは、以て邦を治むること有るべし」(12)と、国境付近での作戦のみを想定する『曹沫之陳』と、「散地には則ち戦うこと無く」(九地篇)と、国境付近での戦闘を回避し、「馳車千駟、革車千乘、帶甲十万、千里にして糧を饋る」(作戰篇)長距離進撃を想定す

る『孫子』との懸隔は大きいとしなければならない(注15)。

(2) 軍の構成と戦闘の形式

『曹沫之陳』の軍隊は、「車間に伍を容れ、伍間に兵を容れ、常有るを貴ぶ」(5)「車連も皆裁つ」(9)「車を率いるには車を以てし、徒を率いるには徒を以てす」(17)と、戦車部隊が主力で、それに歩兵部隊が随伴する、春秋時代の軍隊に一般的な構成を取る。したがって整備された道路以外進めない両軍の進撃経路は、互いに察知し合うことが可能であり、また戦車が戦闘可能なのは平坦な場所に限られるから、双方は同一の地点を会戦が生ずる戦場として予期しうる。そこで戦闘は、互いが遭遇を期す平原での会戦といった、一定の様式に従う形を取る。両軍が戦場で対峙した後には戦闘が開始されるので、必ず正攻法による正面攻撃の形を取り、待ち伏せ攻撃や背後や側面からの奇襲攻撃による勝利は想定されていない。

『孫子』の場合、舞台が中原ではなく長江流域であったことも手伝って、軍は大量の歩兵部隊が主力で、それに戦車部隊が随伴する構成を取る。そのため戦場は必ずしも平坦な地形である必要はなく、「客、水を絶ちて来た

らば、之を水の内に迎うること勿く、半ば済らしめて之を撃つは利なり」(行軍篇)と、渡河する敵軍を対岸で待ち伏せ攻撃したり、「夜戦には鼓金を多くす」(軍争篇)と、夜襲をかけるなどの奇襲攻撃による勝利が想定される。そのため『孫子』では、「兵とは詭道なり」「其の無備を攻め、其の不意に出づ」(計篇)「兵は詐を以て立つ」(軍争篇)と、詭詐権謀こそが兵法の本質だと規定される。これに比べると『曹沫之陳』の兵法は、「奔らざれば爾れ或に興に或に康くして以て会す」(12)と、正々堂々と会戦に臨むといった様式を守る、春秋時代の中原における戦車戦の形式を色濃く保存している。そのため『曹沫之陳』には、「故に兵は詐を以て立ち、利を以て動き、分合を以て変を為す者なり」(『孫子』軍争篇)といった、分進合撃による機動戦の戦術は説かれていない。

(3) 勝利の關鍵

『曹沫之陳』においては、戦闘が一定の様式に従って正攻法で行われるため、『孫子』のように詭詐権謀が勝利の要因とはされず、軍の士気の高さ、兵士の戦意の旺盛さに勝利の關鍵が求められる。したがって『曹沫之陳』には、戦術的な駆け引きに関する記述はほとんど見られず、

君主や指揮官に対して、兵士の士気を鼓舞すべきことが執拗に説かれる。

そのため、「固き謀有るも固き城亡く、克政有るも克陳亡しと。三代の陳は皆存するも、或いは以て克ち、或いは以て亡ぶ」(3)とか、「是の故に夫の陳なる者は、三教の末なり」(5)と、陣法よりも戦意高揚の方策の側が優先される。

その具体的方策としては、「君自ら勞するに憚ること母く、以て上下の情偽を觀よ。匹夫・寡婦の獄訟は、君必ず身ら之を聴け。足らざるを知ること有りて、中らざる所亡ければ、則ち民は之に親しまん」(11)「賞均しくして聴くこと中らば、則ち民は之に和せん」(11)とか、「民の時を獲つこと母かれ、民の利を奪うこと母かれ。功を申べて食わせ、刑するには梟有るを罰し、賞するには惠有るに爵す」(5)などと、民衆の生活に配慮した国内統治、能力本位の人材登用、公平・適切な賞罰などが挙げられるが、「爵を撰むこと母かれ」(12)「勝つは則ち禄爵に常有りて、忌に之れが当たること莫ければなり」

(16)「賞を重くし刑を薄くして、其の死を忘れて其の生くるを見んことを思い、良車・良士は往きて之を取らんことを思うのみ」(16)「獲たるを賞して恵るを詔し、以て其の志を勸む」(18)と、軍功を上げた者に対する重

賞を約束して、兵士の戦意を高揚させる手段が強調される。

主に歩兵として軍に動員される民の戦意は、極めて乏しい状況にあった。そのため彼らを重賞で釣って戦わせようとする主張がくり返されるのだと考えられる。

兵士の士気を鼓舞する方策としては、地位の高い人物を指揮官に選任することが挙げられる。「凡そ貴人は前位の一行に処らんことを思う。後るれば則ち亡ぶを見ん。進むには必ず二將軍有り。將軍無ければ必ず数獄大夫有り、裨大夫無ければ必ず数大官の師・公孫公子有り。凡そ有司・率長は、伍の間に必ず公孫・公子有り。是を軍紀と謂う」(5)とか、「君如し親ら率いれば」(6)「是の故に長は必ず邦の貴人及び邦の奇士と約し、卒を御し兵を使う」(7)「人、士を使わば、我は大夫を使う。人、大夫を使わば、我は將軍を使う。人、將軍を使わば、我は君身ら進む。此れ戦いの頭道なりと」(12)「其の将卑にして、父兄は薦めず、邦由り之を御す。此れ師を出だすの忌なり」(13)などと、敵軍の指揮官よりも地位の高い人物を指揮官に任命し、なおかつ君主をはじめとする貴族が先陣を切つて戦う姿勢を示せば、民は統治者が本気だと感じて戦意が高揚し、勝利できると述べられる。

この場合、指揮官にどのような軍事的才能が要求され

るのかについては、ほとんど言及されない。むしろ身分の高い貴族であること自体に、重要な意味が認められている。これは、軍に歩兵として大量動員された民に、戦争の遂行を自分自身の問題と理解し、自発的に戦おうとする認識が低かったことの反映であろう。民が、戦争は統治階層が勝手に始めたもので、自分たちには関係がないにもかかわらず、戦場に駆り出されて迷惑千万だとか受け止めなければ、戦意が低くなるのは当然である。こうした感情を払拭するためには、君主をはじめとする貴族が先陣を切つて戦う姿勢を示し、貴賤を問わない一体感を得させる必要があつたのだと考えられる。

『孫子』の場合も、民の戦闘意欲が極めて低い状態を前提にしているが、「勇怯は勢なり」(勢篇)と、將軍が案出する詭詐權謀によつて民の戦意の低さを補う形が取られ、そこに勝利の關鍵が求められるため、將軍には極めて高度な軍事的才能が要求されることとなり、「凡そ此の六者は、敗の道なり。將の至任にして、察せざるべからざるなり」(地形篇)「將軍の事は、静かにして以て幽く、正しくして以て治まる」(九地篇)などと、『孫子』にはそれに関する記述が頻出する。

また『孫子』が想定する戦争は、敵国の奥深く侵入する長距離進撃の形態を取るため、君主親征はもとより、大量の

公孫・公子・貴族などを軍に編入し、国内に統治階層が長期間不在である状態を招くことは不可能である。これに對して『曹沫之陳』の場合は、進撃距離も短く、期間も短く、国境近辺での会戦が想定されているため、君主をはじめとする貴族が先陣を切つて戦う形態が可能だと考えられているわけである。

(4) 陣法の特徴

『曹沫之陳』に示される陣は、「車間に伍を容れ、伍間に兵を容れ、常有るを貴ぶ」(5)「車連も皆裁つ」(9)「車を率いるには車を以てし、徒を率いるには徒を以てす」(17)と、戦車と歩兵の混成部隊から成り、戦車と戦車の間に随伴歩兵を配置する形で、横一列に展開する戦列「行」を組む。

そして「凡そ貴人は前位の一行に処らんことを思う。後るれば則ち亡ぶを見ん」(5)「厚食を【立つるは】、前行を為さしめんと思えばなり。三行の後に、苟も短兵を見れば」(8)とあるように、この戦列を前・中・後の三行配置する。

「五人は伍を以てし、万人は【軍を以てす】」(5)と、一軍は一万人とされ、また「三軍出づるときは、君自ら

率い、必ず羣・有司を聚めて之に告ぐ」(5)「卒に長有り、三軍に帥有り、邦に君あり」(7)「能く百人を治むるものは、百人に長たら使め、能く三軍を治むるものは、帥いせんことを思いて『之』に授く」(11)「三軍境に出でて必ず勝つは、以て邦を治むること有るべし」(12)「三軍大敗して勝たず」(14)などと、決まって三軍が出動するとされているから、総兵力は三万前後となる。したがって三軍で出征した場合、一行は約一万人の兵力で編制されることになる。

ただし魯の莊公(在位：前六九三～前六六二年)と同時代の春秋時代前半(前七七〇～前五八八年)にあつては、晋が楚を破つて覇者の地位を確立した城濮の戦い(前六三二年)や、晋が魯や衛と連合して斉を討つた臺の戦い(前五八九年)のような著名な大会戦でも、晋の兵力は戦車が七百乗から八百乗、兵員数が二万余の規模であるから、魯単独で三万の兵力を動員できたとするのは過大である。したがって『曹沫之陳』が記す兵力数は、莊公当時の実数ではなく、兵力数が増加して三・四万から十万に及んだ、春秋時代後半(前五八七～前四〇四年)の状況を反映したものであるろう。

『曹沫之陳』には、これ以外の陣形は全く記述されないから、上記の陣形が普遍的な陣形と考えられていたの

であらう。これは、春秋時代に中原で行われていた戦車の典型的な形を保存するものと言えよう。

『孫子』はほとんど陣形に言及しないから、『曹沫之陳』との比較はできないが、銀雀山前漢墓から出土した『孫臏兵法』には陣形に関する豊富な記述が存在する。『孫臏兵法』八陳篇には、「陳を用うるに参分し、陳誨に鋒有り、鋒誨に後有りて、皆令を待ちて動く。闘は一、守は二にして、一を以て敵を侵し、二を以て収む」と、兵力を三分割し、先鋒一、後衛二の比率で配置する陣形が示される。これは、布陣する際の一般的・原則的陣形で、陣の側縁が末広がり、八の字形になるところから八陣と称され、後代の魚鱗の陣に相当するものである。

さらに『孫臏兵法』十陳篇では、「凡そ陳に十有り。方陳有り、円陳有り、疎陳有り、錐行の陳有り、鴈行の陳有り、鉤行の陳有り、玄襄の陳有り、火陳有り、水陳有り」と、一般形以外の特殊な状況と用途に応じた十種類の陣形を示し、それぞれの運用法を詳細に解説する。これに比べると『曹沫之陳』には、さまざまな用途に応じた陣形が示されることはなく、前・中・後の三行から成る一般的陣形しか登場しない。こうした現象は、『曹沫之陳』の想定する戦争が、戦車を主力とする軍隊同士の正攻法による会戦といった単純な形態を取るため、ことさらに複雑な

陣形を必要としなかったためであらう。

『孫子』勢篇は、「凡そ戦いは、正を以て合い、奇を以て勝つ」と、正法で敵と対陣した後、次々と奇法を繰り出して勝利すべきことを述べる。また『孫臋兵法』奇正篇は、「形以て形に応ずるは正なり。無形にして形を制するは奇なり」「同じければ以て相勝つに足らず。故に異を以て奇と為す」とか、「是を以て静の動に為るは奇、佚を以て勞に為るは奇、飽の飢に為るは奇、治の乱に為るは奇、衆の寡に為るは奇なり」「奇発すれば而ち正と為るも、其の未だ発せざる者は奇なり。奇発するも報いられざれば、則ち勝つ」などと、奇正の運用法を詳細に解説する（注15）。

これに対して『曹沫之陳』は、「其の之を去ること速からず、其の之に就くこと附からず、其の節を啓くこと疾からざるは、此れ戦の忌なり。是の故に疑陳は敗れ、疑戦は死す」（13）と、戦闘に際しての禁忌を述べるが、そこで問題にされているのは、戦場に向けての軍の移動が迅速でなく、戦場への各部隊の集結が緊密でなく、戦場到着後に戦闘隊形を組むことが迅速でないことなどである。

確かに縦隊で行軍して戦場に到着した後、遅滞なく横に展開して戦闘隊形の車列に変換する運動は、高度な技量を必要とする。すなわち『曹沫之陳』が陣形に関して

問題視しているのは、この展開運動の速やかな完了のみであって、両軍対陣後の奇法に関する戦術が説かれることはない。布陣が完了し、戦闘が開始された後は、上述のように、ひたすら士気を鼓舞して、兵士に勇戦・力闘させる点にのみ、勝利の要因が求められるのである。

さらに陣法に関する特色としては、劣勢を立て直す方策への関心が強い点が挙げられる。劣勢建て直しの方策は、「敗戦を復する」「槃戦を復する」「鉗戦を復する」「缺戦を復する」の四種に分かれる。

最初の「敗戦を復する」場合は、「三軍大敗して勝たず」（14）との状況が前提にされている。したがって完敗を喫した軍が戦場の近辺で態勢を立て直すことは不可能で、態勢の挽回は、軍が都城に撤収して解散したのち、改めて国内で行われる。軍の再建を述べる部分には残欠が多く、必ずしも文意が明快ではない。

しかし、「死」者は之を収め、傷者は之を問う。死者に善くするは生くる者の為なり。君は慎まざるべからず。依らざれば則ち恒ならず、和せざれば則ち輯わず」（15）とか、「戒しめよ。勝つは則ち祿爵に常有りて、忌に之れが当たること莫ければなり」（16）といった内容からして、戦死者の死体を収容し、負傷者を労つて、戦闘で死傷した兵士に敬意を払う姿勢を示す方策により、軍の再興に

際し、動員される民の意欲を殺がないようにしたり、軍功を立てた者への爵・禄の賜与を規定通り実施して、不満が出ないように処置して、国内の結束を図ることなどが、その具体的内容だったと推測される。したがって「敗戦を復する」場合、作戦再興の策源地は、主に本国の都城となる。

二番目の「槃戦を復する」場合は、「既に戦いて豫に復するに、軍中に号令して曰く」(16) との内容から、一度会戦して敗北し、戦場から退却して戦鬪隊形を解き、行軍隊形に戻った状態であることが判明する。行軍隊形に戻ってはいえるものの、軍は解散しておらず、退却して再集結した地点で、態勢の立て直しが図られる。

そのための具体的方策は、「甲を繕い兵を利くせよ。明日將に戦わんとすれば、則ち旌旗は傷亡するも、槃は行に就け……」(□人。吾れの戦うは敵天命に順わざればなり。師を返して將に復せんとすと。戦うに殆ぶむこと母かれ。民をして疑いを思わしむること母かれ。爾の龜策に及ぶや、皆曰く、之に勝つと。爾の鼓を改祕すれば、乃ち其の服を失わん。明日陳に復するは、必ず其の所を過ぐ。此れ槃戦を復するの道なり」(16) と述べられる。

すなわち、損傷した兵装・兵器を修繕し、損傷を受けて戦力を消耗した部隊を統合・再編して戦力を回復させ、

敵国の非を鳴らして戦争目的の正当性を再確認し、卜筮で勝利の占断が出たと宣伝して不安を拭い去り、民に雪辱戦の勝利を確信させ、進撃を告げる太鼓を顕示して戦意を高揚させることなどが、その具体的方策である(注17)。

「明日將に戦わんとす」「明日陳に復す」と言われることから、敗退して戦場を離脱したものの、軍はまだ戦場の近辺におり、おそらく数キロメートル後退した地点で再集結していると考えられる。したがって「槃戦を復する」場合、作戦再興の策源地は、戦場のわずかに後方となる。

三番目の「鉗戦を復する」場合は、先頭を進む者に重賞を与えて、後続部隊をも競って前進させ、恐怖心から金縛り状態に陥った軍に進軍を促す方策が示される。

四番目の「缺戦を復する」場合は、「然る後に改めて始む」(16) との内容から、戦場に布陣して戦端を開いたにもかかわらず、兵士に戦意が欠けていたために突撃が不発に終わり、改めて戦鬪開始を企図する状況であると思われる。戦意の欠如を補うために、「収めて之を聚め、束ねて之を厚くす。賞を重くし刑を薄くして、其の死を忘れて其の生くるを見んことを思い、良車・良士は往きて之を取らんことを思うのみ。其の志の起たんことを思わば、勇者は喜ばんことを思い、蕙るる者は悔やまんこ

を思う。然るに改めて始む。此れ缺戦を復するの道なり」(16)との方策が示される。

すなわち、部隊を集結させ、密集隊形を組ませて恐怖心を取り除いたり、重賞薄刑で士気を鼓舞し、優秀な戦車と兵士が死の恐怖を忘れ、生き残って重賞を獲得することのみを夢見て突撃するよう仕向けたり、怯者が勇敢しなければ恩賞にはずれて後悔すると思うように仕向けたりすることが、戦意の欠如を補う方策として示されるのである。

こうして戦意を高揚させたのち、改めて戦闘命令を下すのであるから、態勢立て直しの策源地は、現に着陣している戦場となる。

このように見てくると、態勢を立て直す四種の方策が、いずれも敵軍との会戦をその中心に据えていることが分かる。「鉗戦を復する」場合のように、指揮官は戦場に軍を進ませて、あくまで会戦を目指す。また「缺戦を復する」場合のように、すでに戦場に布陣したにもかかわらず、自軍の兵士が戦意を欠いて突撃をためらう状況下においても、指揮官は叱咤激励して督戦し、何とか全軍に突撃を敢行させようとする。

さらに「槃戦を復する」場合のように、一度会戦して敗退したのちですら、退却地点で劣勢を立て直し、「師を

返して將に復せんとす」と、戦場に戻って再度会戦しようとする。「敗戦を復する」場合のように、「三軍大敗して勝たず」といった完敗を喫しても、なお本国で軍を再建して、敵と再度会戦しようとする。

このように『曹沫之陳』が会戦に強く執着するのは、春秋時代の戦車中心の戦争では、会戦以外に勝敗を決する形式が想定できないからである。したがって『曹沫之陳』は、敵を翼にかけて奇襲して勝つ戦術は説かれないし、逆に敵の奇襲に備える用心も説かれることがない。「鳥の起つ者は、伏なり。獣の駭く者は、覆なり」(行軍篇)と、伏兵や奇襲への注意を促す『孫子』とは、大きく異なっている。

特に「槃戦を復する」方策の記述は、自軍が会戦に敗れ、損傷を受けて退却したにもかかわらず、敵軍が追撃してこない状況を前提にしている。もし会戦での勝利に乗じて敵軍が追撃に移り、徹底した掃討戦を行うのであれば、戦場からわずかに退却した地点に止まって劣勢を立て直し、翌日戦場に戻って再び会戦を挑む行為は全く不可能だからである。

春秋時代に中原で行われた戦車戦においては、両軍が予め会戦の日時や場所を取り決めたり、戦場で対陣したのち、勇者が進み出て致師や請戦の儀礼が行われるなど、

戦闘は一定の様式に従って行われた。車列が乱れて一方が戦闘不能に陥ったり、指揮官が戦死したり、本陣の軍旗が刈られたりすると、その時点で敗北したと判定され、敗者は戦場から退却し、勝者はそれを追撃したりしない決まりであった。

要するに戦争は、貴族を中心とした戦士の美学に則る形で行われたのであり、正々堂々と相まみえ、勇気と戦闘技量を發揮して名誉を獲得する点にこそ、戦闘の本質があると考えられたのである。したがって『孫子』のように、「其の無備を攻め、其の不意に出づ」といった詭詐権謀が戦闘の本質だとは、決して考えられなかったのである。

『曹沫之陳』に描かれる戦闘形態は、春秋時代に中原で行われた戦車戦の様式をおおむね踏襲したものであり、その兵学もまた、基本的にそうした戦闘形態を前提に組み立てられていると言える。

三 『曹沫之陳』の成書年代

『曹沫之陳』は、魯の莊公が曹沫に兵法を問い、曹沫がそれに答える問答体の構成を取る。軍事に関する魯の莊公と曹沫の問答は、『左伝』莊公十年にも次のように見える。

十年春、齊師伐我。公將戰。曹劌請見。其鄉人曰、肉食者謀之。又何間焉。劌曰、肉食者鄙。未能遠謀。乃入見。問。何以戰。公曰、衣食所安、弗敢專也。必以分人。對曰、小惠未徧。民弗從也。公曰、犧牲玉帛弗敢加也。必以信。對曰、小信未孚、神弗福也。公曰、小大之獄、雖不能察、必以情。對曰、忠之屬也。可以一戰。戰則請從。公與之乘。戰于長勺。公將鼓之。劌曰、未可。齊人三鼓。劌曰、可矣。齊師敗績。公將馳之。劌曰、未可。下視其轍。登軾而望之。曰、可矣。遂逐齊師。既克。公問其故。對曰、夫戰勇氣也。一鼓作氣、再而衰、三而竭。彼竭我盈。故克之。夫大國難測也。懼有伏焉。吾視其轍亂、望其旗靡。故逐之。

これによれば莊公十年（前六八四年）の長勺の戦いでは、曹沫は莊公と同じ戦車に搭乗して魯軍を率い、斉軍を撃破している。同じ年の六月にも、斉は宋と連合して魯を攻撃したが、公子偃が莊公の制止を無視して独断で宋軍を攻撃し、宋軍が大敗したため斉軍は退却している。

夏六月、齊師宋師次于郎。公子偃曰、宋師不整。可

敗也。宋敗齊必還。請擊之。公弗許。自郛門竊出、蒙皐比而先犯之。公從之、大敗宋師于乘丘。齊師乃還。『左伝』莊公十年)

莊公十三年(前六八一年)、魯と齊は柯邑で盟約して和睦したが、この間、魯が齊に敗北して領地を奪われたとする記述は、『左伝』には存在しない。莊公九年(前六八五年)に魯は乾時で齊と戦い、莊公が乗り込んでいた戦車を捨てて敗走するといった敗績を喫しているが、曹沫はこの乾時の戦いの指揮を執っておらず、領土が奪われたわけでもない。

したがって次に示すような、曹沫が齊の桓公を脅かして奪われた領土を返還させたとする話も、当然『左伝』には記録されない。

五年、伐魯、魯將師敗。魯莊公請獻遂邑以平、桓公許、與魯會柯而盟。魯將盟、曹沫以匕首劫桓公於壇上曰、反魯之侵地。桓公許之。已而曹沫去匕首、北面就臣位。桓公后悔、欲無與魯地而殺曹沫。管仲曰、夫劫許之而倍信殺之、愈一小快耳、而棄信於諸侯。失天下之援、不可。於是遂與曹沫三敗所亡地於魯。

『史記』齊太公世家)

十三年、魯莊公與曹沫會齊桓公於柯。曹沫劫齊桓公、求魯侵地、已盟而釋桓公。『史記』魯周公世家)

このように『左伝』と『史記』とは、記される曹沫の人物像に大きな違いがある(注18)。このうち『左伝』に見える曹沫は、魯軍を率いて侵攻してきた齊軍を撃破した名将であり、魯の軍事的英雄である。

他方、『史記』に見える曹沫は、勇者ではあっても、齊に三連敗して領土を失ったわけであるから、とても名将とは呼べない人物である。『史記』に見える壮士風の曹沫像の原型は、次に示す『公羊伝』であろう。

莊公將會乎桓。曹子進曰、君之意何如。莊公曰、寡人之生則不若死矣。曹子曰、然則君請當其君、臣請當其臣。莊公曰、諾。於是會乎桓。莊公升壇。曹子手劒而從之。管子進曰、君何求乎。曹子曰、城壞壓竟、君不圖與。管子曰、然則君將何求。曹子曰、願請汶陽之田。管子顧曰、君許諾。桓公曰、諾。曹子請盟。桓公下與之盟。已盟。曹子操劒而去之。要盟可犯、而桓公不欺。曹子可讎、而桓公不怨。桓公之信、著乎天下、自柯之盟始焉。(莊公十三年)

曹沫が会盟の場で斉の桓公を短剣で脅かし、奪われた領土を取り返したとする点は、『史記』と同じであるが、領土を奪われた責任が曹沫にあるとはされておらず、桓公を始めとする魯の君主の責任であるように記される。

『史記』の記述は、曹沫が自らの敗戦の責任を取って斉の桓公を脅かし、奪われた領土を取り返したとする形に、『公羊伝』の内容を改変したものと思われる。

『曹沫之陳』に登場する曹沫は、桓公の政治の仕方を批判して、斉と戦おうとする桓公に兵法を教授しているのであるから、魯の軍事的英雄として描かれているのは明らかで、この点では『左伝』に見える曹沫に近い。ところが『曹沫之陳』でも、魯が斉に領土を奪われている状況が前提とされている。この点では、『曹沫之陳』の状況設定は『公羊伝』や『史記』の側に近い。ただし斉に領土を奪われた原因が、曹沫が魯の將軍として斉に敗北したためだとすれば、敗軍の將が君主に兵を語っていることになり、極めて不自然である。したがって『曹沫之陳』では、斉に領土を奪われた原因は桓公の統治の失敗に帰されているのであろう。

このように『曹沫之陳』の内容は、曹沫の人物像は『左伝』に近く、斉との関係をめぐる状況設定は『公羊伝』

や『史記』に近いといったように、両者を折衷した形になっている。『左伝』と『公羊伝』の記述のいずれが歴史的事実なのかは、詮索する術がなく不明であるが、いずれにせよ、『曹沫之陳』が長勺の戦いにおける曹沫の活躍を下敷きに著作されたことは明白であるから、その成書年代は桓公十年（前六八四年）以降となる。さらに前六六二年に没した桓公の諡号が記されることを考慮すれば、上限は前六六二年以降となる。

上限に関しては、さらに兵力数や軍隊構成の面からも考察を加える必要がある。『曹沫之陳』は、魯が三軍、約三万の兵力で戦うのが常態であるかのように記す。だが上述したように、これは桓公当時の実数としてはあまりにも過大であり、兵力数が増大した春秋時代後半（前五八七～前四〇四年）の状況の反映と考えられる。もとより春秋時代後半になったからといって、魯の兵力数が常時三万に達したとは考えがたいのであるが、作者が春秋時代後半の一般的状況に合わせた結果だと思われる。

また『曹沫之陳』は、軍に大量の民が歩兵として動員されているように記す。これも、貴族中心の戦士が戦車に搭乗して戦った春秋時代前半の状況とは合わず、むしろ民が歩兵として大量に軍に編入されるようになった、春秋時代後半の状況に合致する。

ただし『曹沫之陳』に騎兵が全く姿を見せないことにも留意する必要がある。戦国時代に生じた大きな変化は、北方の遊牧騎馬民族から導入した騎兵の出現である。前四五五年、智伯・韓・魏の三氏が晋陽城を攻撃せんとしたとき、趙襄子は「乃ち延陵王をして車騎を將いて先に晋陽に之かしむ」(『戦国策』趙策)と、戦車と騎兵を先遣隊として救援に赴かせている。これによつて、すでに春秋末期、趙では騎兵部隊が編制されていたことが判明する。

前三〇七年、趙の武靈王が騎乗の便を計り、中華の習俗を改めて胡服の採用に踏み切った事例が示すように、北方の騎馬民族との戦闘を通じて、趙は最も早く騎兵が発達した地域であつた。そして戦国期に入ると、騎兵は急速に各国に普及し、戦国中期には数千騎から一万騎の規模に達し、騎兵から成る襲撃部隊はその卓越した機動性を生かして、一夜のうちに数百里も進撃することが可能となつた。

こうした状況の変化を反映して、「武侯問いて曰く、凡そ卒騎を畜うに豈れ方有るか」(『呉子』治兵篇)「武侯之に従い、車五百乗、騎三千匹を兼ねて、秦の五十万の衆を破れり」(『呉子』勵士篇)とか、「溪谷・險阻なる者は、車を止め騎を禦ぐ所以なり」(『六韜』奇兵篇)「夜

半に輕騎を遣り、往きて敵人の壘に至る」(『六韜』五音篇)「易なれば則ち其の車を多くし、險なれば則ち其の騎を多くす」(『孫臏兵法』八陳篇)と、『呉子』『六韜』『孫臏兵法』といった戦国期の兵法書には、騎兵が登場してくる。これに対して、『孫子』と同様、『曹沫之陳』にも騎兵が全く姿を見せないことは、その成書年代が春秋時代であることを物語るであろう。

以上の検討結果を勘案すると、『曹沫之陳』の成書年代は、春秋中期(前六四八〜前五二七年)よりも遅く、春秋後期(前五二六〜前四〇四年)である可能性が最も高いであろう。上博楚簡の書写年代は、郭店楚簡とほぼ同じ時期、戦国中期と推定されている^(注19)。もとより原著の成立はそれを遡るから、どんなに遅くとも戦国前期には成立していたと考えなくてはならない。本来の『曹沫之陳』は竹簡六十五本を超す大作で、しかも『曹沫之陳』なる篇題を備えていることからして、安定した体裁を保ちつつ、かなり長期にわたつて流伝していたと推定できる。やはりこの点も、『曹沫之陳』の成書年代が春秋後期であつたことを示唆するであろう^(注20)。

これは『孫子』の成立年代とほぼ同じ時期といえる^(注21)。それにもかかわらず、両者の兵学に大きな違いが見られるのはなぜであろうか。その原因の一つは、『曹沫

之陳」が中原の魯で著作されたのに対して、「之を呉越に明らかにす」（『孫臏兵法』陳忌問墨篇）と言われるように、『孫子』が南方の呉越の地で成立したという地域差に存するであろう。

歩兵部隊しか持たなかった呉人が初めて戦車による戦闘法を知ったのは、建国直後の前五八四年、楚から晋に亡命して残る一族を皆殺しにされた申公巫臣が、楚に復讐するため、息子の狐庸を派遣して呉人に戦車の操縦法を教えさせ、楚への侵攻をけしかけたときであった。それ以来、呉軍も戦車部隊を保有するようになったが、長江下流域の水沢地帯で戦車を運用するには、それ相応の努力と工夫が必要であった。

『左伝』定公四年（前五〇六年）には、侵攻してくる呉軍を迎撃するにあたり、楚の大夫・武城黒が將軍・子常に対し、「呉は木を用い、我は革を用う。久しくすべからず。速やかに戦うに如かず」と進言したことが見える。つまり、呉の戦車は全体が木製なのに対し、楚の戦車は皮革で覆ってあるぶんだけ腐りやすく、湿気の多い湖沼地帯でこのまま呉軍と持久戦に入るの是不利だから、早く決戦を挑めというのである。これにより、呉人は戦車を導入したのち、地理的環境に合うように、戦車に耐水性向上の改良を加えたことが分かる。

だがこうした努力によっても、呉人にとつて、戦車が依然として扱いにくい兵器であったことに変わりはない。伍子胥は呉王夫差に対して、「陸人は陸に居り、水人は水に居る。夫れ上党の国は、我れ攻めて之に勝つも、吾れ其の地に居ること能わず、其の車に乗ること能わず」（『国語』越語上）と、呉と中原諸国の間には決定的な地理条件の違いがあり、中原で発達した戦車が呉の地形に適さないことを指摘している。

そのため呉は、戦車には補助的役割を果たさせるに止め、依然として歩兵を軍の主力とした。中原においても、春秋の中期（前六四八〜前五二七年）になると、「晋侯は三行を作り、以て狄を禦ぐ」（『左伝』僖公二十八年）と、前六三二年に独立の歩兵部隊が組織され始める。戦車に随伴する二義的性格を脱した独立の歩兵部隊は、しだいに他の中原諸国にも普及し、その比重も漸次増加の趨勢を辿っていた。ただし、戦車を持たず、山岳地帯から出撃してくる狄に対する必要上設置されたとの起源が示すように、歩兵部隊はまだ補助的役割を果たすに止まり、中原諸国における軍の主力は、その後も依然として戦車部隊であった。

ところが呉では、前四八二年、呉王夫差が黄池（河南省封邱）で晋・周・魯と会盟し、晋と覇者の地位を激し

く争ったとき、百人↓一行、百行↓一方陣、との編制による一万単位の歩兵部隊を三隊組織した（『国語』呉語）ように、完全に歩兵中心の軍隊編制がとられた。

呉の軍隊が歩兵中心に編制されたことは、戦術の面にも一大変革をもたらした。戦車に比べ、歩兵は地形の制約を受ける度合いがはるかに低く、それだけ作戦行動が自由になる。すなわち歩兵は、戦車には超えられない森林・山岳・水沢などの険しい地形をも楽に突破でき、しかもそうした地形を利用して、行軍経路を敵の目から覆い隠せるのである。

そこでこの二つの利点を生かして、複雑な戦術の組み立てが可能となる。兵力を数部隊に分けて進撃させ、目的地を見破られぬようにしながら、あらかじめ打ち合わせて置いた地点に急速に兵力を集中する、分進合撃を用いた敵軍の分断と各個撃破、囫部隊によって攻撃目標を敵に誤らせる陽動作戦、険しい地形に兵力を潜ませての奇襲や待ち伏せ、進軍を秘匿した迂回による敵軍の包囲や背後遮断などがそれである。

その結果、それまでのような両軍対陣後の会戦といった様式以外に、戦闘そのものが完全な詭計によって仕組まれるといった、新たな戦闘形態が発生してくる。したがって敵を欺く詭詐・権謀は、もはや一個の会戦内にの

み限定されることなく、開戦時期の選択から、各部隊の出撃や移動、敵軍の捕捉・攻撃、軍の撤収に至るまで、およそ軍事行動の一切を覆い尽くすことになる。「兵とは詭道なり」（計篇）と宣言する『孫子』は、こうした状況を背景に組み立てられた兵学である。

これに対して『曹沫之陳』は、中原の魯で成立したため、中原の伝統的な戦車戦の形態が濃厚に保存されたのだと考えられる。『曹沫之陳』が説く兵法は、『左伝』が記す長勺の戦いと比較しても、より古風な形態を示している。

長勺の会戦で斉軍を撃破した後、莊公はただちに追撃に移ろうとするが、曹沫はそれを制止し、斉軍の敗走が偽装ではないことや、追撃路に伏兵が存在しないことなどを確認した上で、追撃の許可を出している。偽りの敗走、『孫子』軍争篇が「佯北には従う勿かれ」と警告する「佯北」や、撤退しながら伏兵を配置して、追撃してくる敵を待ち伏せする可能性が指摘されているわけで、一個の会戦に付随する範囲内ではあっても、そこには敵を欺く戦術がすでに用いられていた状況が語られる。『曹沫之陳』には、こうした戦術への言及は見られないから、その兵法は『左伝』が記す長勺の戦いと比較しても、より古風な形態を示していると言える。

莊公十年（前六八四年）の夏、齊は宋と連合して再度魯を攻撃したが、公子偃が莊公の制止を無視して独断で宋軍を攻撃し、乗丘で宋軍を大敗させている。公子偃は郎に到着した宋軍の陣立てが終了していないのにつけ込んで勝利したが、当時はすでにこうした戦法が用いられ始めており、『左伝』莊公十一年には、乗丘の敗戦の報復に侵攻してきた宋軍を、魯軍がまたもや「宋師未だ陳せざるに之に薄る」戦法で撃破したことが記される。しかも「凡そ師は、敵未だ陳せざるを、某の師を敗ると曰い、皆陳するを戦と曰い、大いに崩るるを敗績と曰い、僞を得るを克と曰い、覆いて之を敗るは某の師を取ると曰う」と、こうした戦法が決して珍しい例外ではなかったことを窺わせる解説まで添えられている。

前六三八年、宋は泓水のほとりで楚と戦ったが、このとき宋軍はすでに万全の布陣を完了しており、一方の楚軍は渡河の最中であつた。そこで臣下はこの機に乗じて攻撃すべきだと進言したが、襄公はそれを卑劣な戦法だとはねつけ、楚軍が渡河し、さらに戦列を整え終わるまで待つて戦端を開いた^{注22}。結果は宋軍の大敗に終わったが、世に宋襄の仁として喧伝されたりもした。この事例は、「未だ陳せざるに之に薄る」戦法が一般化しつつあるとともに、なおそれを戦士の美学に反すると軽蔑する考え方も、一部に残っていた状況を示している。『曹沫之陳』には、この手の奇襲戦術が見

えず、その点ではむしろ『左伝』が記す乗丘の戦いよりも古風な印象を与える。

もとより『左伝』が記す長勺の戦いと『曹沫之陳』の兵法の間には、共通点も多い。齊との戦いに踏み切る際、「民弗従也」と民の動向が重要な判断材料とされることや、曹沫が「夫戦勇氣也。一鼓作氣、再而衰、三而竭。彼竭我盈。故克之」と、会戦で勝敗を決する鍵を勇氣に求め、三度の突撃にもかかわらず魯の堅陣を突破できず、齊軍の氣力が尽きた頃合いを見計らって突撃命令を発した点などは、勇戦による突撃を重視する『曹沫之陳』の内容と合致している。

したがって『曹沫之陳』の兵学は、莊公や曹沫と同時代である春秋時代前期（前七七〇〜前六四九年）の状況を基本に据えながら、会戦の形態に関しては、それよりも古い西周期（前一一〇〇〜前七七年）の伝統を引き継ぐ一方、民の大量動員による兵力数の増加に関しては、それよりも新しい春秋後期（前五二六〜前四〇四年）の状況を取り込むといった、新旧の層が墨層的に混在する性格を示している。

これまで古代中国兵法の研究は、現存する最古の兵書である十三篇『孫子』から話を始めざるを得ない状況が続いていた。だが今回の『曹沫之陳』の発見によって、

典型的な中原の兵学と、呉・越といった長江下流域を舞台に成立した兵学との比較研究を進めることが、初めて可能となったのである。

注

- (1) 墨家の非命説の詳細に関しては、拙著『墨子』（講談社学術文庫・一九九八年三月）参照。
- (2) この点の詳細については、拙稿「郭店楚簡『窮達以時』の「天人之分」について」（『集刊東洋学』第八十三号・二〇〇〇年五月）参照。
- (3) 「疆地毋先必取□焉」の欠字は、住民を意味する文字ではなかったかと思われる。
- (4) 以下に続く呼称との関係から判断して、この「將軍」が常設の官職名だった可能性は低く、むしろ「晋に六將軍有り」（『墨子』非攻中篇）「吳王孫子に問いて曰く、六將軍晋国の地を分守す」（『孫子兵法』吳問篇）といった用法と同じく、卿の身分を指す爵名だった可能性が高い。
- (5) 「數獄大夫」の「數」は数人の意味であろう。「獄大夫」は大夫の中で特に軍律維持を職掌する者の呼称で、「獄」は職分を表示する名称、大夫は身分を表示する爵名であろう。「裨大夫」は大夫の中でも一段身分の低い副官クラスを指

す爵名であろう。「數大官之師」の「數」はやはり数人の意味で、「大官」は役所を、「師」は役所の長を指す呼称であろう。

- (6) 冒頭の欠字は供給の意味を表す文字だったと思われる、ここでは仮に「立」字を補って置いた。

- (7) この未釈字「𠄎」は、文意から「担」字に解釈して置いた。

- (8) 『孫子』では、「兵者國之大事也」「此兵家之勝」（計篇）と、「兵」が軍事の意味で使用される例が多いが、『曹沫之陳』の「兵」は、すべて兵器の意味で用いられていて、軍事を指す「兵」の用例は見られない。

- (9) 『孫子』は行軍篇や地形篇などで、各種の地形が軍事行動に及ぼす影響を詳説するが、『曹沫之陳』では、進撃距離の短さを反映して、地形に言及することが少なく、残された竹簡の範囲内で見える限り、地形に触れるのはこの箇所のみである。

- (10) 「圯」は土が小高く盛り上がった様で、ここでは敗走して散らばった兵士を一箇所に呼び集めて、密集隊形を組ませる意味に取った。

- (11) 「戡戾」二字は文意から「旗旄」に解釈したが、「寄託」の意に取る可能性もある。

(12) 『尉繚子』には、「明主戦攻之日、合鼓合角」(攻權篇)「夫將提鼓揮枹、臨難決戰」(武議篇)とある。

(13) この欠字は、激励・督戦の意味を表す文字だと思われる。

(14) この点に関しては、竹田健二「『曹沫之陳』における竹簡の綴合と契口」(『東洋古典學研究』第十九集・二〇〇五年五月) 参照。

(15) この点に関しては、拙稿「十三篇『孫子』の成立事情」(『島根大学教育学部紀要』第十三巻・一九七九年十二月)、及び湯浅邦弘『中国古代軍事思想の研究』(研文出版・一九九九年十月) 参照。

(16) この点の詳細については、拙著『孫子』(講談社学術文庫・一九九七年六月) 参照。

(17) 占いを利用して味方の士気を高める方法は、『墨子』号令篇にも「巫祝史與望氣者、必以善言告民」と見える。

(18) 長勺の戦いに先だって曹沫と莊公が問答を交わしたとする記事は、『国語』魯語上にも見えるが、『国語』の方は戦前の問答だけで記事が終わっていて、曹沫が魯軍を指揮して勝利したとする部分は存在しない。

(19) この点に関しては、『上博館藏戰國楚竹書研究』(上海書店出版社・二〇〇二年三月) 所収の「馬承源先生談上海簡」、及び李學勤「孔孟之間與老莊之間」(『新出土文献與先秦思想重構國際學術研討會會議論文』二〇〇五年三月) 参照。

(20) 寥名春「楚竹書《曹沫之陳》與《慎子》佚文」(『新出土文献與先秦思想重構國際學術研討會會議論文』二〇〇五年三月) は、『曹沫之陳』の「魯莊公將爲大鐘、型既成矣。曹沫入見曰」や「今邦彌小而鐘愈大。君其圖之」に近似した文章が、「慎子曰」として諸書に引用されることを指摘して、『曹沫之陳』の成書年代の下限を、慎到が斉の稷下で活動した宣王・湣王の時期とする。

(21) 『孫子』の成立時期については、拙稿「十三篇『孫子』の成立事情」(『島根大学教育学部紀要』第十三巻)、及び湯浅邦弘『中国古代軍事思想の研究』(研文出版) 参照。

(22) 『左伝』僖公二十二年。

附記：小論は、湯浅邦弘教授(大阪大学)を研究代表者とする独立法人日本學術振興会・科学研究費補助金・基盤B「戦国楚簡の総合的研究」による研究成果の一部である。